

熊本県立図書館蔵『韻府群玉』について

米谷隆史

『韻府群玉』二〇巻は、宋代の末、陰氏応夢と、その子の幼達・幼遇兄弟の撰になる類書である。編纂の過程を記す序の記述によると、はじめて開版されたのは元代初期、延祐元年（一三二四）をさほど下らぬ頃と考えられる。ただし、現在のこの版によるテキストは伝わらず、現存の諸本は、原本を増修した元元統二年（一三三三）の刊行本を始源とする。

配列は一〇六韻による漢字分類に従う。各掲出字の項には、まず、諸書によつて掲出字の意味や使用文脈を示し、さらに、掲出字を末に置く語句についても同じく使用文脈等を記載する。漢字の韻や意味を知るといふ韻書の機能と、韻に叶った語句を典拠とともに一覧できる類書の機能を兼ね備えた本書は、刊行後広く行われ、和刻本を含め、諸版が現存する。

熊本県立図書館蔵の『韻府群玉』（821. 1/イ）は、所謂「五山版」の内的一本で、南北朝期に京都五山で出版されたものである。現存は一五冊で、二〇巻二〇冊中、第

二巻から第六巻を欠く。また、第一五巻四丁は補写である。各冊とも、改装の朱表紙。表紙左肩の無地題箋に「韻府（七十九、二十大尾）」と書名を墨書し、表紙中央には各冊所収の韻目を打ち付けて墨書する。韻目が改まる丁の柱欄上には薄青の付箋を貼付する。全体に版面の状態は良く、巻末に彫り残し部分も見られることから、かなり早い段階の刷本とみられるが、惜しむらくは、全体に虫損が目立つ。

第一巻四丁裏には「元統甲戌春／梅溪書院刊」とあることから、元統二年に大陸で出版された刊本の覆刻本であることが知られる。また、第一巻三丁他の匡郭左下欄外には「明」と刻工の名前が刻されている。これは南北朝期に來日した「彦明」という刻工とされており、一四世紀後半に本邦で刊行された他の版本にも同じくその名が刻まれていることから、この『韻府群玉』もその頃の出版とみられる。

本文中への書き入れは、朱が主で墨は少なく、前半部に

やや多く見られる。句点、合符、圏点、典拠名、稀に返点や送り仮名を記しており、典拠名で最も多いのは「毛」で、「排句」「詩学大成」がわずかに見られる。匡郭上（稀に左右）には典拠や増注、校訂等を墨書した付箋の貼付が見られ、典拠名には「排句」、「（東）坡（詩）」などの他、「句會」、「詩」、「谷」、「蒙」求、「（詩学）大成」、「晋書」「才子」、「唐（書）」、「通命」、「漁隱叢話」、「義楚六帖」、「杜詩」、「碧岩（象）」、「崔林玉露」、「三体詩」、「左」等が見られる。

蔵書印はいずれも朱で、各巻一丁表右下匡郭外に単辺陽刻で方形「似星堂木下／文庫之章」、方形陰刻で「韓村／蔵書」、第二〇巻末のみに単辺方形陽刻で「守玉」と見られる。なお、この印の上には「守玉」と墨書がある。その他に、各冊末左下匡郭外には「洞仙」の墨書がある（写真ではバーコードシールの下）。このうち、「韓村」は、幕末に時習館訓導を務めた木下韓村であろう。

識語は第二〇巻末に次のように存する。

江州蒲生郡一華院 / 越州逆乱之時求旃云々

「一華院」は臨濟宗の塔中かと思られるが、『蒲生郡史』には見えず、現存も不明である。周知の通り、室町後期以降、近江・越前は一向一揆や朝倉家をめぐる攻防など、多くの戦乱にみまわれる。「逆乱」の考証と旧蔵者に関する

調査は今後の課題としたい。

五山版の中でも、『韻府群玉』は珍重されたのみえ、比較的伝存数も多い。しかし、戦国の動乱をくぐり抜けて熊本に伝存する本書が、県下に存する古版本の中でも貴重な一本であることは疑いあるまい。

なお、本稿で述べた、『韻府群玉』の構成や成立、開版事情等は、参考文献に示した川瀬・住吉・柳田三氏の論考に拠っている。

参考文献

- 川瀬一馬 『五山版の研究』（昭和四五年三月）
住吉朋彦 『韻府群玉』版本考（一）（『斯道文庫論集』第三十五集、平成一三年二月）
柳田征司 『玉塵』の原典『韻府群玉』について（『国語史学の為に 第二部 古辞書』、昭和六一年五月）
武藤巖男 『肥後先哲偉蹟 後編』（昭和三年七月）

韻府羣玉序

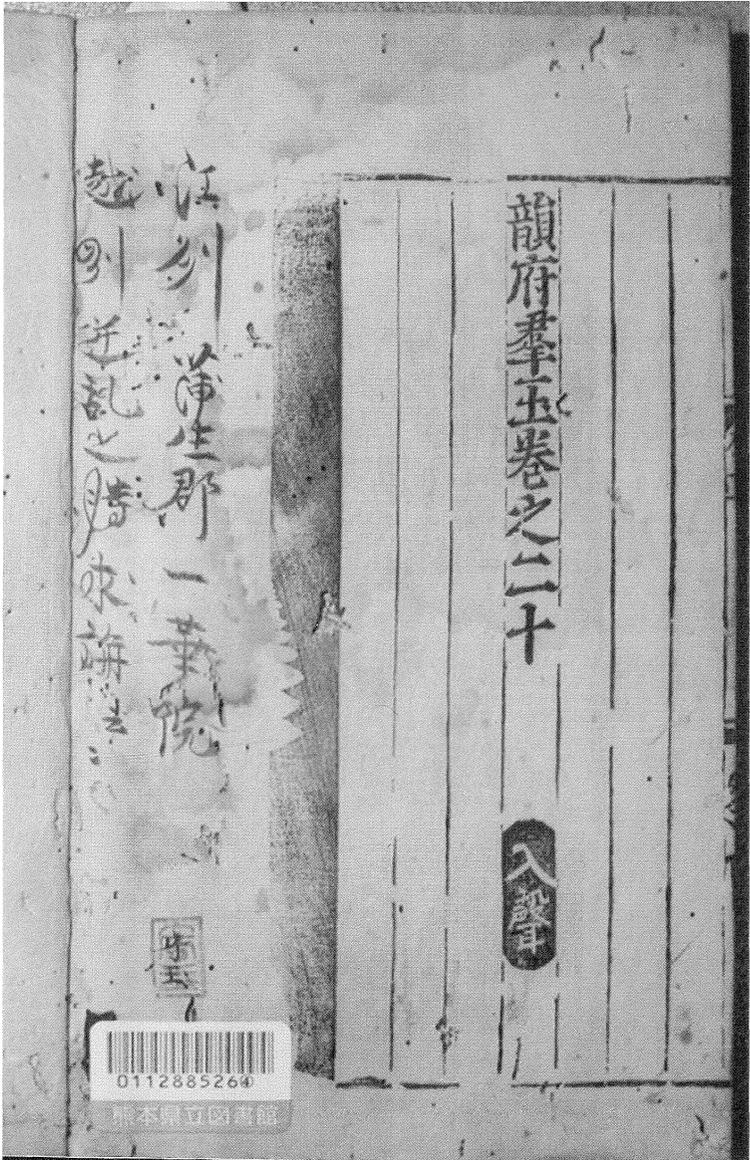
翰林

滕玉霄序

自乾坤相爻而成八卦盪摩剛柔以極於萬有一千五百二十之數蓋字生於聲聲生於氣其為無窮之字則皆四聲二氣之離合四象八卦之雜揉耳然雖無窮也至於四聲韻出而字亦窮矣非字窮也困於萬有一千五百二十之數者窮也吾友陰君昆仲為韻府羣玉以事繫韻以韻摘事經史子傳蒐獵靡遺是又能以有窮之

熊本
立
函
書
館
藏
五
山
版
韻
府
羣
玉
第
一
卷
卷
頭

熊本 立 函 書 館 藏、五山版『韻府羣玉』第一卷卷頭



第二十卷卷末 58頁解説参照。